

ALSになった記者の「意地」

大熊 由紀子 国際医療福祉大大学院教授



—中村藍撮影

政策に切り込んだ社会派番組から叙情豊かな作品まで、山陰放送記者の谷田人司さんは、その掘り下げた仕事ぶりが高く評価されていました。その谷田さんに07年、不治の病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)が襲いかかりました。視力、聴力、感覚、知力が保たれているのに、手足や喉、舌を動かす筋肉が痩せ細り、最後には呼吸筋が動かなくなつて死に至る恐ろしい病気で

くらしの明日

私の社会保障論

人工呼吸器をつければ寿命を全うできますが、日本では生きることを諦め、つけない人が7割と推定されています。理由の多くは「介護の負担で家族に迷惑をかけるのが怖い」。

ところが、デンマークの友人たちに聞くと「考えられない」という答えが返ってきました。家族や友人の精神的な支えは大切だとしつつ、介護や看護の公的な支えが当たり前とされているからです。

谷田さんは2年前から人工呼吸器をつけ、障害者自立支援法などを活用し、デンマークに近い24時間対応のサビナスを受けています。わずかに動く指でパソコンを打ち、培

家族に気兼ねし死を選ぶ社会とは

った人脈を生かして企画を提案。山陰放送は、谷田さんを社員として遇し続けています。

東日本大震災が起きた時、谷田さんは被災したALSの先輩、土屋雅史さんを取材しようと思ひ立ちました。メールで交通機関の手配や取材交渉を進め、バッテリーを載せた車いすで仙台に向かいました。「記者の意地です」

取材で谷田さんは、震災で停電が5日も続く中、近所の人たちが発電機やガソリンを持ち寄り、交代で手動の呼吸器を動かし、土屋さんの命をつないだことを知ります。「1日を大事に生きれば良い」という土屋夫妻の言葉に、谷田さんは「共に生きる意義を再

認識しました」と振り返りました。

ALSが進行すると、体のどこも動かず、全く意思表示できない完全閉じこめ症候群(TLS)になる可能性がります。それでも生きることが意味があるのか。答えを探しに、谷田さんは東京都小金井市の鴨下雅之さん一家を訪ねました。雅之さんは家族にとつて、かけがえのない夫であり、父親であり続けていました。妻の章子さんは「遺影に言うのとは違う。聞いてもらえていると信じているので幸せです」と語りました。

その取材の一部始終を、後輩のディレクター、佐藤泰正さんたちが「生きることを選んで」という番組にまとめ、2月に放送しました。この記者魂に、第1回の日本医学ジャーナリスト協会大賞が贈られました。「家族への気兼ねから死を選ぶことのない社会にするための捨て石になれば」という谷田さんの言葉が、重く響きました。

日本医学ジャーナリスト協会賞 NPO日本医学ジャーナリスト協会が25周年を記念して創設。第1回協会賞が10月に発表された。大賞は、他に下野新聞の「終章を生きる 2025年超高齢社会」。特別賞にタバコ問題情報センターの月刊紙「禁煙ジャーナル」とNPO法人地域精神保健福祉機構・コンボの月刊誌「こころの元気+ (plus)」。いずれも社会にインパクトを与え、挑戦精神に富んだ独創的な作品。

「くらしの明日」は毎週金曜日掲載。次回は湯浅誠さんです